

Title	研究成果からの事業モデル確率—大学発ベンチャーを事例として
Author(s)	寺川, 眞穂
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/47154
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	寺川真穂
博士の専攻分野の名称	博士（経営学）
学位記番号	第 20834 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 経済学研究科政策・ビジネス専攻
学位論文名	研究成果からの事業モデル確立－大学発ベンチャーを事例として－
論文審査委員	(主査) 教授 小林 敏男 (副査) 教授 浅田 孝幸 教授 金井 一頼

論文内容の要旨

本論文は、「研究成果からの事業化モデル確立」と題し、大学における研究成果を事業としてどのようにすれば成立させられるか、という点を考えることで、大学発ベンチャー（以下、「大学発 VB」）のみならず、一般のスピンアウト VB、あるいは既存企業における新規事業開発にも適用できる方法論を考察することである。

第 1 章から第 3 章では、事業化の必要性和事業化プロセスの検討について述べる。新規性のある研究成果の事業化を考える場合、既存企業への知的財産ライセンス、または大学発 VB 創成の 2 つが選択肢として考えられるが、早期に事業化するには、後者が選択されることが多い。この場合、新規事業創造に向けた事業化計画が必要になり、「技術開発」に加え、製品コンセプト、価格、流通方法等のマーケティングプランである「市場探索」が重要になる。

第 4 章では、「技術開発」と「市場探索」という、相反する 2 つの指向性をマネジメントする観点から「事業化プロセス」を捉える。「技術開発」では、研究成果に端を発する技術の再現性、安定性、効率性が、クローズド・システムにおいて追求されるのに対し、「市場探索」では、研究成果がもたらすことのできるソリューションの新規性、集約性、確実性が、オープン・システムにおいて追求され、互いに相反する指向性を有している。こうした特質により、これら 2 つを統合する事業化プロセスは、不安定な試行錯誤を伴うものとならざるを得ない。この二律背反調整のためのマネジメント・ツールを、とりわけ関係者ネットワーク構築とマネジメント課題設定から提示する。

第 5 章では、事業化プロセスに対し発展段階を設定し、各段階における課題を大阪大学における事業化プロジェクトの事例に基づいて考察し、整理する。

第 6 章では、最終的に事業モデルを確立させるための事業化プロセス、後半段階に重点を置き、大学発 VB の経営資源の欠乏を補い、最終段階を安定させるための施策として、パートナーシップを取り上げる。ただし、大学発 VB がパートナー企業に依存しているという点は、今後の成長において弱点となり、これが継続すると経営基盤の脆弱性を招きかねないため、事業が安定していくに従い、資源依存関係を逆転させるような戦略をとることを提言する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、大学発 VB がややもすれば陥りがちになる「技術開発」一辺倒の指向性に、「市場探索」の指向性を導入

するのみならず、それら2つの相反する指向性をどのようにすればマネジメントしていけるかを、具体的事例から抽象された独自理論をもとに、著書自らが大学発 VB 支援に関与することによって携わってきた案件を実証的に整理した有意義な研究である。社会的ニーズに比べて、その解明が遅れている大学発 VB という分野に焦点を当て独自理論を展開したことについては、高く評価できる。よって本論文は博士（経営学）に値する、と評価する。